

刺激ペアリング手続きを使ったひらがなの読み指導 ～データに基づく指導方法の検討～

要旨

ひらがなの読みが未習得の生徒に、刺激ペアリング手続きを用いた読み指導をおこなった。刺激ペアリング手続きとは、文字、音声、絵（意味）を時間的に近接した状態で提示することで3つの要素間の等価関係を成立させるという手続きのことである。指導の効果をデータで確認しながら、3期に分けて指導方法の検討をおこなった。ひらがなの読みの獲得までは順調に進んだが、維持の点で課題が残った。刺激語の選び方や課題の合格条件、強化の仕方、ひらがな指導の前提条件としての音韻認識の確認などが今後の課題である。

1 行動分析における学習指導

ひらがなの読みの獲得には音節分析のうち音節分解と音節抽出の2つが代表的な行動である。音節分解とは、音声を持つ各音節に対応して反応することで、音節抽出とは、音声の中から特定の音節を抽出する行動である。ひらがなの読みは音韻認識という認知モデルが考案されているが（天野,1988）、行動分析学では音節分析を「音節が弁別刺激となって制御される反応」という行動随伴性として分析できるとしている。この例のように行動分析学における行動の変化に関する基本的な法則は、読み書き計算といった学習指導にもあてはめることができ、その成果が報告され始めている（野田 2018）。

2 刺激ペアリング手続きとは

「読む」とは文字という視覚刺激に対して音声で反応するという行動と捉えることができる。つまり文字という視覚刺激と音声との間に対応関係を作っていくことである。これをABC分析にあてはめると、A=文字、B=音声反応、C=強化となり、AとBの等価関係が成立することが文字が読めることであるといえる（浅野・山本 2023）。文字と音声の等価関係を作る教え方の一つに刺激ペアリング手続きという方法がある。文字、音声、絵（意味）を時間的に近接した状態で提示することで3つの要素間の等価関係を成立させる（図1）。知的障害など読みに困難を示す子どもへの有効性が多く示されている（Omori & Yamamoto, 2013a, 2013b；野田・豊永, 2017；Omori & Yamamoto, 2018）。

3 目的と方法

ひらがなの読み及び音節分解が未習得の生徒1名に、刺激ペアリング手続きを使った読み指導を行う。指導の時間は1回10分程度で、主に週1回の国語の時間に行った。期間は約半年間。

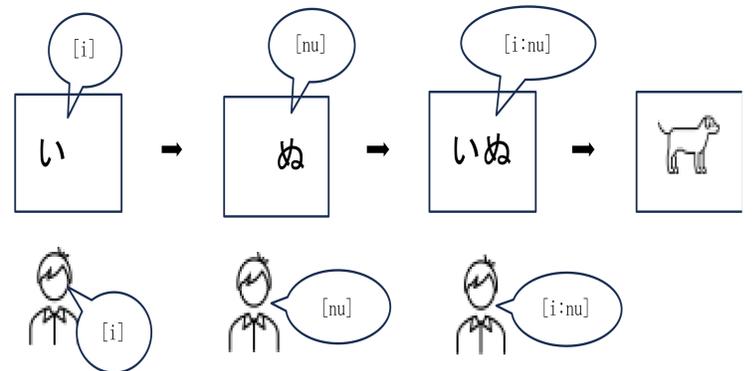


図1 刺激ペアリング

4 指導の経過と結果

指導の後に毎回テストを行い、その効果を見ながら3期に分けて指導方法の修正をおこなった。見直したのは以下のような点である。

- ・課題の難易度の調整（刺激語は1音または2音の単語にする）。
- ・教材に飽きがこない工夫（教材の途中にお気に入りのキャラクターをいれる）。
- ・画面に集中しやすい環境設定（生徒が画面を見るタイミングに合わせて手動で切り替える）、座席を壁向きにするなど。
- ・強化は「課題に従事していること」に行うのではなく「ひらがなが読めること」へ行っていることを明確にし、生徒自身がひらがなを読めるようになってきたことが楽しいと実感できるようにする。

ペアリング手続きで2音節の単語23語が読めるようになったが、維持テストでは定着していなかった。

5 課題

(1) データに基づく指導について

結果をみながら環境の調整を数回にわたって調整した。指導に効果が見られない時、その原因を子ども側に求めるのではなく周囲の環境側に求め改善していく姿勢が応用行動分析学の基礎にある考え方とされる。個に焦点をあてていることから個別最適化につながる指導であるといえる。

(2) 強化について

「強化」とは行動と後続する事象の関係を示す用語であるが、対象とする行動が変化しなければ強化したとはいえない。この意味で今回の指導ではフィードバックが弱く、子ども自身が自分が何を目標に学習しているのかが明確にわかるよう十分伝えきれていなかった。

(3) ひらがな指導を行う前提条件について

行動分析学では音節分析を「音節が弁別刺激となって制御される反応」という行動随伴性として分析できるとしているが、音節がわからなければ弁別刺激としての機能が果たせないことから、ひらがなの読み指導の前提条件についての確認が必要である。